

Case Reports of Workshop focused on Facilitating a Sense of Ownership within the 2030 Agenda for Sustainable Development and SDGs

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村山, 史世, 石井, 雅章, 陣内, 雄次, 高橋, 朝美, 滝口, 直樹, 長岡, 素彦, 村松, 陸雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1049

2030 アジェンダ・SDGs を理解し、自分事化するためのワークショップの実践 6つの事例と自分事化のフェーズ

Case Reports of Workshop focused on Facilitating a Sense of Ownership within the 2030
Agenda for Sustainable Development and SDGs

村 山 史 世 ⁱ	Fumiyo MURAYAMA
石 井 雅 章 ⁱⁱ	Masaaki ISHII
陣 内 雄 次 ⁱⁱⁱ	Yuji JINNOUCHI
高 橋 朝 美 ^{iv}	Asami TAKAHASHI
滝 口 直 樹 ^v	Naoki TAKIGUCHI
長 岡 素 彦 ^{vi}	Motohiko NAGAOKA
村 松 陸 雄 ^{vii}	Rikuo MURAMATSU

1. はじめに

2015年9月に2030アジェンダ・SDGsが採択されて以来、わが国では内閣に持続可能な開発目標（SDGs）推進本部を設置し、持続可能な開発目標（SDGs）推進円卓会議での協議や持続可能な開発目標（SDGs）実施指針の公表、2017年には第1回ジャパンSDGsアワードの表彰などSDGsの普及啓発活動に努めている。2018年は環境省の「持続可能な開発目標（SDGs）を活用した地域の環境課題と社会課題を同時解決するための民間活動支援事業」や内閣府地方創生推進事務局の「SDGs未来都市及び自治体SDGsモデル事業」など、政策としても市民や事業者、自治体に対する政策が動き出している。企業や市民セクターでもSDGsは自らの活動を見つめ直し評価する共通言語として注目されている。

ところで、SDGsは持続可能な開発のためのアジェンダ(以下2030アジェンダ)の一部である。アジェンダとは、ビジョンを共有した多様な主体が持続可能性のための価値を共創するための自主的な行動計画である。SDGsの17のゴールと169のターゲットは最低限の達成目標であるが、それ以上の目標を設定した行動計画を設定しても構わない。課題の相互関連性と解決のための多様な主体の連携・協働(マルチステークホルダー・パートナーシップ)に基づいた良き統治を志向するというSDGsの構造さえ押さえておけば、主体的なアジェンダの設定を行ってよい。その際に、自らの現状と、自分たちの課題と資源を把握したうえで、SDGsと自分たちをつなげ、SDGsを「自分事化」する必要がある。

ⁱ 工学部客員准教授 ^{ii iv vi} 環境研究所客員研究員 ⁱⁱⁱ 教育学部教授（宇都宮大学）^v 大学院客員准教授
^{vii} 工学部教授（環境システム学科）

村山・相場は SDGs を自分事化するツールとして SDGs おでんを開発¹し、大学の講義などのワークショップで活用している。このツールは、「未来の学びと持続可能な発展・開発研究会（みがく SD 研）」²のメンバーの協力・助言を得ながら漸進的に改善を図っている。またみがく SD 研のそれぞれのメンバーも、SDGs を自分事化することの重要性を共通認識として有し、個人あるいはチームで SDGs を自分事化するワークショップを開催している。本稿は、みがく SD 研メンバーが実施した SDGs ワークショップの 6 つの事例を紹介する。6 つの事例は、いずれも自分たちの「課題」が出发点であり、自分たちの「課題解決」のために SDGs を活用している。

6 つの事例は、次節で詳述する「自分事化のフェーズ」³に基づいて整理している。第 3 節以降では、各事例の企画者ないしファシリテーター事例を紹介し、文末にはワークショップの企画シートを添付した。

2. 自分事化のフェーズ

「自分事」にすることとは、事象を自身との関係に基づいて理解することである。すなわち、SDGs の自分事化とは、SDGs と自分との関係を理解することに他ならない。本論では、自分事化のフェーズを以下のように分類した。

- ① 存在を認識するフェーズ： 世界が目指す SDGs という目標が存在することを認識する段階。この段階では、SDGs に関する情報を得ることが具体的な活動となる。
- ② 内容を理解するフェーズ： 2030 アジェンダと SDGs に記述されている内容を理解する段階。この段階では、SDGs で示される内容を理解するための研修や、啓発に向けた情報発信が具体的な活動となる。
- ③ 活動に当てはめるフェーズ：SDGs の各目標を自身(自組織)の活動に当てはめる段階。自身の活動と SDGs の各目標との関連性を認識する段階である。この段階では、各自の事業活動や施策をそれらと関連する SDGs の各目標とマッチングすることが具体的な活動となる。
- ④ 活動を当てはめるフェーズ： 自身（自組織）の活動を SDGs の各目標に当てはまる段階。SDGs の達成に貢献できる自身の活動を認識する段階である。この段階では、SDGs の各目標の達成に貢献できそうな各自の事業活動や施策を列举して、マッチングすることが具体的な活動となる。
- ⑤ ステークホルダーに当てはめるフェーズ： 自身と関係するステークホルダーと SDGs の各目標との関係を当てはめる段階である。この段階では、自身（自組織）のステークホルダーを列举し、それらと SDGs の各目標との関係を整理し、可視化することが具体的な活動となる。
- ⑥ ステークホルダーとの関わり方を捉え直すフェーズ： 自身とステークホルダーの関係を SDGs の観点から捉え直す段階。この段階では、ステークホルダーそのものと SDGs の関係を認識するのではなく、自身（自組織）とステークホルダーの関係（例えば、取引関係など）を、SDGs の観点から捉え直し、必要に応じて関係を再構築することが具体的な活動となる。
- ⑦ 既存システムを捉え直すフェーズ： 自身が立脚（依存）するシステムを SDGs の観

点から捉え直す段階。この段階では、サプライチェーンなどの自身が立脚（依存）する既存のシステムを SDGs の観点から捉え直し、必要に応じてシステムを新規創造、再構築することが具体的な活動となる。

- ⑧ システムにおけるあり方を捉え直すフェーズ： 自身が立脚（依存）するシステムにおける自身（自組織）の存在について、SDGs の観点から捉え直す段階。この段階では、主に生態系システムなど的人為的には変更することができないシステムにおける自身の存在を再認識し、当該システム内でのあり方を捉え直し、事業や施策に反映させることが具体的な活動となる。

3. 事例1「身近な地域課題とSDGsを関連づけるワークショップ」(陣内雄次)

3-1. 実践の概要

本ワークショップは、栃木県のS新聞社主催、Nホールディングス共催、栃木県及び栃木県教育委員会後援により、2泊3日の合宿形式で開催された研修「とちぎの高校生による『課題発見力を学ぶ』特別ワークショップ」でのセッションの一つである。募集対象は県内の高校に通う生徒（1～3年生）であり、募集定員20名のところ26名が参加した。近い将来、社会に出て活躍するために必要な「自分の力で課題を見抜く・捉える力」を身につけるため、同世代の参加者と一緒に考える研修である。三日間のカリキュラムは次のとおりである。

1日目：①自己紹介とオリエンテーション

②SDGsワークショップ「広く多角的な視点、理想の社会像に触れる」

2日目：①講義・ワークショップ具体的な事例と関連付けながら「身近な問題に置き換えて考える」

②「県内で実際に課題と向き合っている方」とのトークセッション

③ワークショップ「課題のつながりを考える イシューマップづくり」

④グループ発表と質疑応答

3日目：①プレゼンテーションの手法を学ぼう

②「気づいたこと、学んだこと」を発表してみよう

筆者が担当したのは、二日目のセッション①「身近な問題に置き換えて考える」と②トークセッションの一部である。セッション①の目的は、1日目のセッション①SDGsワークショップ「広く多角的な視点、理想の社会像に触れる」を受け、ローカルイシューのとらえ方を学ぶと共に、ローカルイシューとSDGsとの関連性への気づきを導きだすことにあった。本セッションのおおまかな流れは以下のとおりである。

① 本セッションのガイダンス

② 【各自】地域課題を付箋に書き出す。一枚にひとつ。何枚でも。とりあえずは「質より量」

③ 【グループワーク】模造紙に②の付箋を貼り付けていく。

④ ③の検討内容を模造紙を使って発表

⑤ 【グループワーク】各グループで特に重要と考える地域課題を抽出し、関連するSDGsのアイコンを模造紙に貼り込む。

⑥ 本セッションの振り返り

3-2. 成果と課題

各自が付箋に書き出した地域課題を、「重要度＝縦軸」、「空間的広がり＝横軸」に貼り付けることで個々人が考える地域課題の多様性と共に、一定の地域課題（高齢化、人口減少など）は共通していることも認識することができた。次に、各グループで話し合い、SDGsの17のアイコンを同じ模造紙に貼り込んだわけであるが、このプロセスを経て、1日目のSDGsワークショップ「広く多角的な視点、理想の社会像に触れる」で体感したグローバル 이슈が身近な地域課題（ローカル 이슈）と地続きであることに気づいたようであった。

しかし、高齢化や人口減少は地域社会における社会現象の一つであり、それらが「なぜ、イシューなのか」という点についての議論が不足していたことは大きな反省点である。また、ローカル 이슈とSDGsのつながりへの気づきでとどまってしまっている。一人ひとりができることは何なのかについて検討を深めることで、自分事化へと意識を向けることができたのではないかと考える。

3-3. 高校生を対象とするSDGsワークショップの意義と意味

E SDに関するグローバル・アクション・プログラム（2013年の第37回ユネスコ総会で採択）の優先行動分野に、ユース（E SDを通じて持続可能な開発のための変革を進める若者の参加の支援）、地域コミュニティ（E SDを通じた持続可能な地域づくりの促進）が盛り込まれている。一方、東日本大震災後、高校生のまちづくり参画の動きが活発になっており、併せて地域からの要請も増しつつある。このことから、持続可能な地域づくりの担い手となっていく高校生がSDGsを知る機会や、自らが実践している地域活動とSDGsを接続するワークショップなどの重要性は高いと言えよう。

4. 事例2： これまでの取組とSDGsの関連を理解し、達成に貢献できるターゲットを明確にするワークショップ（高橋朝美）

4-1. 実践の概要

本ワークショップは、総務省「全国地域づくり人財塾」の受講生である自治体職員のOB/OGが自主的に開催しているフォローアップ研修の第22回目として高橋が依頼を受け、実施した。自治体職員がメインだが、企業、NPOも一部参加している。今回は「最近よく聞くけれど自身は良く知らないSDGs」について理解を深める目的で実施されており、「SDGsが良く分かった」というレベルで終わらず、その本質を知り、「自らの取組に結び付ける」というところをゴールとした。おおまかな流れと狙いは以下のとおりである。「自分事化のフェーズ」の、「②内容を理解するフェーズ」が①に該当し、「③活動に当てはめるフェーズ」が②、③に該当する。また、このワークショップによって、④のプロセスで「⑤ステークホルダーに当てはめるフェーズ」への気付きを得るというところ狙っている。

- ① レクチャー：SDGsの本質を理解する
- ② ワークショップ1：これまでの取組をプロセス分解図で整理する
- ③ ワークショップ2：これまでの取組がアプローチしてきたゴール・ターゲットを整理する
- ④ ワークショップ3：これからのアクションをSDGsで考える

4-2. ワークショップにおける工夫

SDGs と取組を結び付けるときに、ロゴ等を使用して実施するパターンもあるが、十分に SDGs を理解しないままに実施すると、表面上のラベリングにとどまってしまう、その後の戦略に活かすことができない場合がある。本ワークショップの特徴は、プロセス分解図(図1)にてプロセスを振り返り、課題意識・ミッションを再確認することから始める点で、図を記載する際には、SDGs との紐づけを意識しないこともポイントである。出発点の課題が何だったのか、それに対してどういうアクション(課題に対する取組 A)を取って、それによってどのような新しい気付き、状況の変化(外部要因)があり、取組が広がっていったのか(取組 A'、取組 B)。それらが展開する中で、どんな課題が生じ(内部要因)、さらなる展開へとつながっていったのかを、記述式で書き込む(ワークショップ①)。それについて、グループ(または個人)で、その取組がどのゴール、ターゲットにアプローチ出来ているか/し得るかを考えていく。そうすることで、本来の目的と課題設定から、達成できていることの確認、現状での課題が見え、次のアクションを考えやすくなる。

4-3. 成果と課題

本ワークショップでのアウトプットではないが、上記のワークショップによって、例えば図2のようなプロセス分解図が完成する。これによって、実施者からは「SDGs は最近の流行ワードの1つだが、これまではなかなか日々の自治体業務との関連が見いだしにくかったというのが正直なところだった。今回の研修で、業務分解を通じたワークを行うことで、遠くにあった SDGs が身近にあることを実感した。」「国連が打ち出した SDGs という遠いことに思うけど、こうした地域での取組が持続可能な社会に繋がっていること、SDGs というおおきなブランドの力で、異分野のヒト・組織とつながり仲良くできる可能性がある。」等の感想があり、SDGs を自らと結びつけるという目的はある程度達成できたと考える。特に、こちらのガイドなしにも、いくつかの取組の目指すターゲットが、「16. 6: あらゆるレベルにおいて、有効で説明責任のある透明性の高い公共機関を発展させる。」に導かれたことは、自治体職員に対するワークショップの成果としては大きい。

本ワークショップを展開する上での課題は、何かしらの業務や活動にある程度従事している素地がなければ難しく、汎用性があるとは言えない点である。じっくり時間をかけて自分の取組と SDGs のつながりを考える、戦略を練る上での一つのアクションとして、活用されることを期待する。また、このワークショップで整理ができるのはあくまでも現時点までの取組と

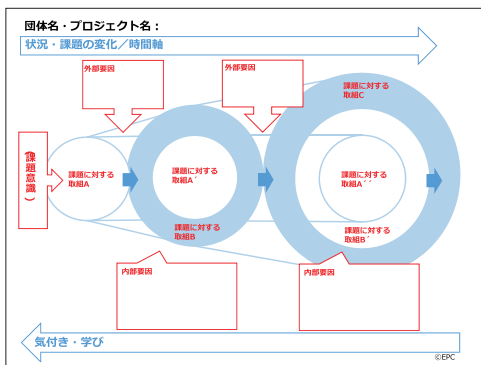


図1 プロセス分解図

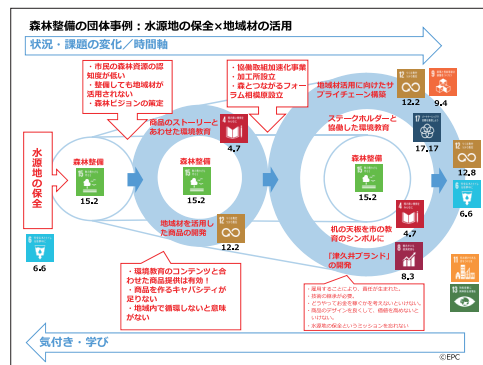


図2 プロセス分解図(完成図)

SDGs のつながりの整理までである。ここから先、どのようにそれを戦略として活用するかについては、実施者の目的による。

5. 事例3：「持続可能性」を体感するためのSDGsワークショップ（石井雅章）

5-1. 実践の概要

本実践は、2018年1月30日に東京都中央区の「協働ステーション中央」で開催された「NPO×企業×地域で解決する17の課題-SDGsでつながろう-」において、「わたしたちにとってのSDGsを考えよう」というテーマで筆者が実施したワークショップである。

当該イベントは、東京都中央区及びその周辺に居住・勤務する人々を主な対象にして、自治体、NPO、企業、住民等による協働のきっかけづくりを目的として開催され、約60名（申込は70名以上）が参加した。当日は参加者を6〜7名ずつの9チームに分けて、下記で説明するワークを実施した。

5-2. 実践の目的・工夫

本ワークショップは、当該イベントの冒頭から100分を使って、多様な参加者に対してSDGsを理解してもらうことを目的としてデザインされた。ワークショップをデザインにあたっては、①立場の異なる多様な参加者それぞれにとって有意義な内容になること、②SDGsについての既存知識の有無にかかわらず参加できること、③SDGsを体感的に理解することができること、④SDGsの17ゴールと自らの関心を単に当てはめるワークにしないこと、⑤ワークショップを通じて多様な主体による協働への関心が高まることを目指した。

上記の点を考慮して、本ワークショップではSDGsが掲げる「持続可能性」の概念を体感的に理解することを目標に設定した。「持続可能性」をワークの中心課題に設定することで、環境や貧困など特定分野への問題関心や、既存知識の有無にかかわらず参加が可能になり、SDGsの17ゴールを羅列及び当てはめをするのではなく、多様な参加者が各課題に関する持続可能性をどのように捉えているのかを共有できるようになった。

本ワークショップは、参加者同士のアイスブレイクを兼ねた「成年自己紹介」と、提示された課題の過去・現在・未来の状態を可視化する「持続可能性マトリックス」の作成、成果物の共有と振り返りによって構成される。

「成年自己紹介」は、2018年の12年前である2006年時点で自身がなにをしていたのか、現在(2018年)なにをしているのかについて、チームメンバー同士で共有する自己紹介である。2030年が2018年の12年後であることを生かして、次の成年である2030年までの時間感覚を体感することを目的としており、その後続くワークへの練習を兼ねている。

「持続可能性マトリックス」の作成は、以下の手順でおこなう。

- ① : SDGsの簡単な説明
- ② : ワークの目的・方法及び成果物のイメージを提示
- ③ : お題の提示（提示するお題ごとに用いる付箋の色を指定する）
- ④ : 昔・現在・将来時点での「お題の達成状況」をメンバー各自が模造紙に付箋に添付
- ⑤ : 可視化された「お題の達成状況」を元に、各自の状況判断の根拠や原因を説明

(出てきた根拠や原因は黄色い付箋で模造紙に添付する)

⑥ : ④から⑤を繰り返す

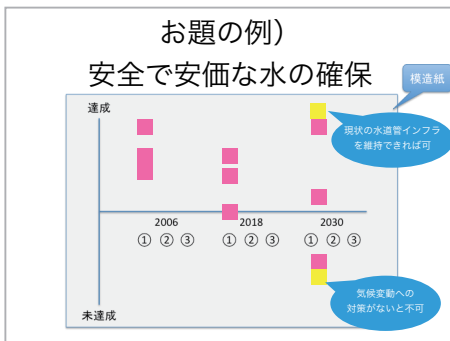


図 3 「お題の達成状況」添付イメージ

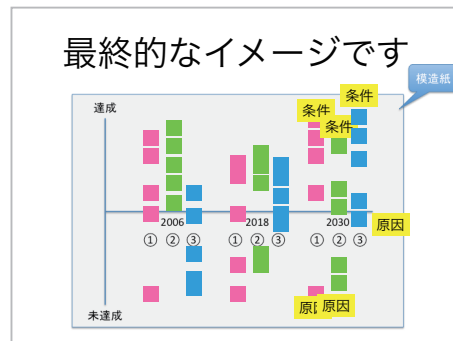


図 4 「持続可能性マトリックス」完成イメージ

「持続可能性マトリックス」は、SDGs の 169 ターゲットから作成した「お題」について、過去・現在・未来においてどの程度達成できているかを想定し、各メンバーが同一の模造紙上に添付し、可視化するワークである。SDGs として提示されている 17 のゴールと 169 のターゲットは、項目によっては日本ですでに達成済と捉えられがちであるが、実際には自然及び社会環境の変化によって持続可能性が脅かされることは大いに考えられる。チームメンバーの「達成状況」イメージを付箋によって可視化し、それらの根拠や原因を共有することで持続可能性に対する感覚を広げていくことができる。

全体での共有及び振り返りについては、各チームの成果物を発表してもらう手法も考えられるが、本実践においては時間的制約や発表を聴く側の集中力を考慮し、時間を区切って各チームの成果物を自由に見てもらう方法を採用した。

5-3. 成果と課題

アンケートの回答 (N=40) を集計すると、ワークショップ全体の満足度に関しては、満足 21 名 (53%)、やや満足 18 名 (38%)、どちらでもない 3 名 (8%)、やや不満 1 名 (3%)、不満 0 名 (0%) という結果で、概ね好評であったと考えられる。自由回答の記述がほとんど得られなかったが、「個人の背景が違うのに、結構同じ傾向になったり、バラけたりするのが興味深い」というようにデザインの意図が適切に伝わっていたと思われるコメントがあった。

他方、「もう少し議論ができるとよかった。時間の制約もあり表面的な議論。一面的な議論になってしまった」や「お題が抽象的で(良い点も多いが時間が少ないので)個々の共有が分かりにくかった」という意見も見受けられた。これらの点を今後は改善していくべきであると考えている。

6. 事例 4 「SDGs を活用して市民、企業、自治体で地域課題の解決を目指す」(長岡素彦)

6-1. 背景

2005 年より国連 DESD 持続可能な開発のための教育の 10 年(以下、ESD 持続可能な開発

のための教育の10年を「DESD」と略する)と、第1次ESD国内実施計画(第1次)以前からESDを推進してきたESDJ持続可能な開発のための教育推進会議(元理事)として、国内でのESDの推進・普及を行った⁴。また、DESD期間中はESDワークショップを多数企画実施し、SDGs策定後はSDGsワークショップを行っている。

6-2. 問題点

現状のSDGsワークショップの問題はESDと関係なくSDGsワークショップが行われていて、ESD(SDGs4・7)も理解していないこと、また、ワークショップは「理解」のワークショップばかりで、教育等の手法や効果は考えられていないことである。その結果、参加者は「SDGsについてよくわかりました。」などの感想を持つにとどまり地域と世界を持続可能にするにはいられない。

6-2. SDGsワークショップシリーズ

これからワークショップシリーズの構成、ワークショップの構成、学習者が気づいて、学習一行動をすすめる方法のワークショップの評価の手法⁵を定めて、ESDのワークショップ「持続可能な未来」とSDGsワークショップシリーズを統合して再編成した。

ワークショップシリーズの構成を「SDGsを理解する」、「SDGsを考える・整理する・協働する」、「SDGsを活用して課題の解決を目指す」などの目的別に分け、「SDGsを理解する・SDGs・ESD」「SDGsで考える・整理する・協働する」「SDGsを活用して市民、企業、自治体で地域課題の解決を目指す」などのワークショップシリーズ化した。

6-3. SDGsを活用して課題の解決を目指すワークショップ

SDGsワークショップ「SDGsを活用して市民、企業、自治体で地域課題の解決を目指す」は、SDGsの基本から、自分事として考える手法や学生、市民、企業、行政、大学が協働してSDGsに取り組むやり方などを学ぶために企画された。SDGs⁶と問題点⁷のレクチャー、企業や学生、NPOの事例発表とすでにおこなわれているSDGs教育・ESD(SDGs目標4「教育」の7項)の事例紹介や「学びのふりかえりシート」による評価も行った。このSDGsワークショップの詳細は、「SDGsワークショップ事例シート」と雑誌「環境会議」に掲載された記事⁸を参照されたい。



写真 1 SDGsワークショップの様子



写真 2 「持続可能な未来」とSDGsワークショップ教材

7. 事例5 環境再生保全機構 若手職員ワークショップ（滝口直樹）

7-1. 経緯・概要

2018 年夏に、独立行政法人環境再生保全機構（以下、「機構」という。）において、SDGs に関する研修、若手職員向けワークショップを実施する機会を得た。

機構は、環境省所管の独立行政法人で、環境分野の政策実施を担っており、公害健康被害補償予防制度、石綿健康被害救済制度の運営、NPO／NGOへの助成を行う地球環境基金の運営、環境研究総合推進費の実施などを担当する。環境行政の実施事務のうち、基金／助成等資金の管理を担っている組織と整理できる。理事長含め理事4名、監事2名、職員148名の比較的小規模な組織である。

機構は、環境分野の政策実施を担っていることから、SDGs の内容に深く関わる事業を実施している。環境保全はもちろんのこと、公害や石綿ばくろによる健康被害者の補償、救済業務も行っていることから、健康、格差問題にも関わる業務を担当していると言える。

特にNPO／NGO活動への助成を担当する地球環境基金は、2019 年度助成から SDGs を強く意識した助成を行おうとしており、NPO／NGOとやりとりをする担当職員が SDGs について深く理解することは必須であった。このワークショップ開催のきっかけは、地球環境基金担当職員向け研修である。その後、経緯があり、職員全体向けの研修、若手職員を対象としたワークショップ実施につながっていった。

7-2. 研修会の実施

上記のような経緯があり、まず機構職員向けの研修会を開催した。90 分の講義形式の研修で、理事長以下 100 名近い参加があり、筆者より SDGs の背景、目標の内容、特徴などについてレクチャーを行った。その際、SDGs のゴールだけではなくターゲット全体の和訳・英文本文を配布している。機構の業務は SDGs の内容そのものであり、具体的な行動目標に即して研修を行った方がいいと判断したからである。

フェーズで言えば「②内容を理解するフェーズ」の作業を行ったことになる。

7-3. 若手職員向けワークショップの趣旨

研修会の 10 日後、若手職員向けワークショップを開催したが、当初より研修からワークショップへつなげると企画されていたわけでは必ずしもない。元々このワークショップは、研修会とは別企画で機構が毎年作成・公表している環境報告書の特集「ERCA の SDGs」⁹内の一企画として実施されていたものである。ワークショップの概要は 2018 年度環境報告書に掲載され、機構のホームページ¹⁰でみることができる。

研修に参加する若手職員は、採用 2-5 年目で、所属部署は、管理部門から個々の業務部門まで多様であった。機構担当者からは、環境報告書の企画であることもさることながら、各職員が SDGs を通じて、自分の仕事の意義を再確認できるような機会にしてほしいとの要望があった。

7-4. ワークショップの準備

参加者に次の事前準備をお願いした。

ア 頭の整理として以下についてワークシートに記入する

- ・SDGsのうち、気になるゴール、ターゲットは何か選ぶ
- ・それが気になった理由を書き出す
- ・SDGsに関わり、自ら、業務、個人／市民活動のなかでやってみたいものを書き出す

イ SDGs おでんシートの事前準備

アの作業を踏まえて、ワークショップ当日に使用するSDGs おでんシート¹¹について、事前に記入してくる。関心のある課題とその2030年の目標、そして目標の実現のための道筋を、SDGsを活用しながら考えてもらうことをねらいとした。

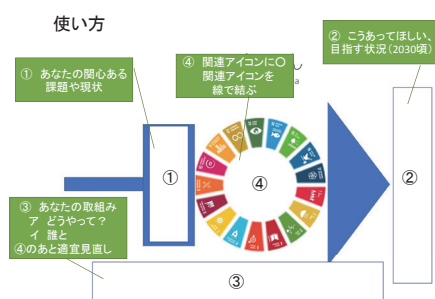


図5 SDGs おでんの使い方

7-5. ワークショップ実施

ワークショップは13名の参加、2時間で実施した。まず、機構担当者及び筆者より、2030年を見据えた今後の経済社会の状況、機構の業務の特徴について簡単な情報提供をし、参加者に準備したシートを適宜修正してもらった上で、グループに分かれ、互いのシートについて、発表、意見交換を行った。

最後に、全員にシートについて発表してもらい、ファシリテーターである筆者や他の参加者との意見交換を行った。自分事化フェーズに当てはめると、「④活動をSDGsに当てはめる」作業をメインにしなが、「⑤ステークホルダーに当てはめる」段階の気づきを期待するものとして構成した。

7-6. 評価

各参加者が、ワークショップの素材とした課題意識を見ると、おおむね担当業務に関する課題が多かったが、一部、地域活性化や外国人労働者問題などより広い視野での課題に目を向ける参加者もいた。

機構は、環境政策の実施機関であり、業務の枠組は制度の中で厳密に決められている。そのため、参加者が、意欲的な目標設定ができるか若干不安ではあった。しかし、ワークショップで参加者が提示した目標をみると、こうした制約を超える意欲的なものも見られた。現場の業務の見直しの中から、システムの改革を進めていくことも重要である。もちろん、実現は容易ではないが、意欲があることを見いだせたことは、参加者、研修実施者双方にとって有意義であった。

また、SDGsは視野を広げる効果が期待される。参加者の振り返りにも、そのような感想も見られた。システムを変え、活性化していく上で、SDGsの活用は一つのやり方という気もしている。

8. 事例6 学生と共に学ぶSDGs ワークショップ (村松陸雄)

8-1. 実践の概要

本ワークショップは、2018年9月15・16日に聖心女子大学で開催された「未来の先生展2018」に、「未来の学びと持続可能な開発・発展研究会(みがくSD研)」が出展した講座枠(90分間)で実施したものである。今回、ワークショップ内容が全く白紙の段階から、麻布大学、神田外語大学、武蔵野大学の学生10名に企画メンバーになってもらい、一からワークショップをつくり上げるプロセスを学生が経験することも大学教育の一環として意図した。8月の事前ミーティング(写真3)における学生たちからの辛辣な意見、「先生たちは教えすぎ!!!」を真摯に尊重し、「できるだけ教えずにSDGs ワークショップする」という挑戦的なメインコンセプトも学生発意によるものである。

8-2. ワークショップにおける工夫

今回のWSのねらいは、(1)SDGsが目指す2030年の<世界>を自分たちのあたまで考えて理解する、(2)前向きなくモヤモヤを感じてもらうことで、学びをWSの時間のみに完結することなく、SDGsに対する能動的な未来の学びへ誘う、とした。今回のように、参加者が当日まで確定しないWSの場合、参加者のSDGsの知識レベルはまちまちであり、教員の性として、SDGsについて全く知らない参加者のレベルに合わせて、SDGsに関して懇切丁寧にわかりやすく講義してしまいがちである。実際、このイベントの別セッションのSDGsに関連したWSでは、話題提供者による取り組み事例紹介を中心としたSDGsの講義に時間の大半を費やしていた。話題提供者が情熱をもってSDGsに取り組んでいることは共感できたものの、WSが単に話題提供者から参加者へのSDGsに関する知識伝達場に終始しており、SDGsを自分事化することからは程遠い印象を受けた。

このWSでは、SDGs初学者であっても誰一人取り残されることなく、SDGsエキスパートの人でも新しい学びが得られるようにデザインしたワーク「モノクロアイコンから2030年に向けて目指すべき状態を想像する」を実施した。SDGsを所与のものとして、モノクロアイコン(写真4)を端緒にした連想により世界のあるべき状態をじっくりと考えることを通して、そもそも、なぜ、世界の人々がSDGsという目標を設定しようとしたのかという根本的な考え方を共有することを試みた。おおまかな流れは以下のとおりである。

- ① ホームグループで、モノクロアイコンから連想するキーワードを抽出
- ② 他のグループに別れて、モノクロアイコンから連想するキーワードを抽出(1回目)
- ③ 他のグループに別れて、モノクロアイコンから連想するキーワードを抽出(2回目)
- ④ ホームグループに戻って、抽出された連想キーワードを元に、目指すべき状態の文章で表現する(図6)
- ⑤ 自由に移動して、各チームの成果物を共有する
- ⑥ 振り返りシートにもとづき、ワークショップ内容を振り返る

8-3. 成果と課題

振り返りシートの回答から、企画者が想定したWSのねらいを概ね達成できたと考える。紙面の関係で、詳細の分析は別の機会に報告する予定であるが、振り返りシートの主要な回答を

以下に抜粋して紹介する。

「本日のように先生が教えずぎず、参加者主体で進めていくスタイルは、とても楽しくやりがいがあった。正直いろいろなことを、講師や学生から受けられるかなと思っていて、そういう受動的な態度ではなく、能動的に学ぶことが大事なんだと思った。もっと詳しく知りたいと思ったため、能動的に調べていこうと感じた。」

「目標を達成するためにアイコンを作って広めることはいいことだが、アイコンやその説明だけでは伝わらない大切なことがたくさんあると思った。ワークショップを通じて、様々な考えをもつ様々な年代の人と話し、意見交換することができた。土台を同じにすれば、経験の差は関係なく、気軽に話せる機会をつくれると思った。」

「はじめはマークから読み取れるものだけから考えていたが、ものの見方や価値観、違いといった抽象的なテーマに当てはめて考えるようになった。」

「SDGs の 17 にはないアイコンだった。あれっ？と思った。既習事項に囚われがちの自分に気付かされた。」

「最初、SDGs は国連が作った固いものというイメージだった。でも、自分たちでアイコンを見て、イメージからアイデアをたくさん出し、自分たちで理想の目標をたてるということをして、SDGs が自分たちのコトバで表されてジブンゴトになった気がする。でもまだ SDGs がジブンゴトになるためには、もっと具体的なことをつなげてみないとイメージがわきにくいのでそこをもっと知りたい。」

「自分の見方や考え方が一面的であると感じた（芸術、平和、色に着目しがち）。他人の意見と自分の意見でどちらを採用するか二択になった時、自己のためではなく、チームの考えとして、どのようにすべきかを考えるのに苦労した。どんな時も、マイナス意見を裏返して平和で良い方向にもっていこうとすることができる、ということを感じました。」

「アイコンを上下左右置き換えるだけで、全く別のイメージがわく。テーブルのメンバーが変わると、そこであがってくるキーワードも変わってくる。（黄、青、緑の付箋（キーワード）の雰囲気もそれぞれ）」

「アイコンから考えられるキーワードを探していると、正解を必ずしも出さなくてもいいのだと感じた。柔軟な想像力を使うのが必要なのだと思った。」

このWSの内容は、今回のイベントに向けて新規に開発された書き下ろしのため、実践経験が乏しいことが課題であり、今後、さまざまなところで本WSを活用することにより内容がより精緻化することが期待される。さらに、このWSだけでSDGsの自分事化の全てのフェーズに到達することができないことは自明であり、他のWSとの効果的でシームレスな展開方法を検討することで、自分事化のフェーズのステップアップを図れるような統合的なプログラムを開発することも必要であろう。

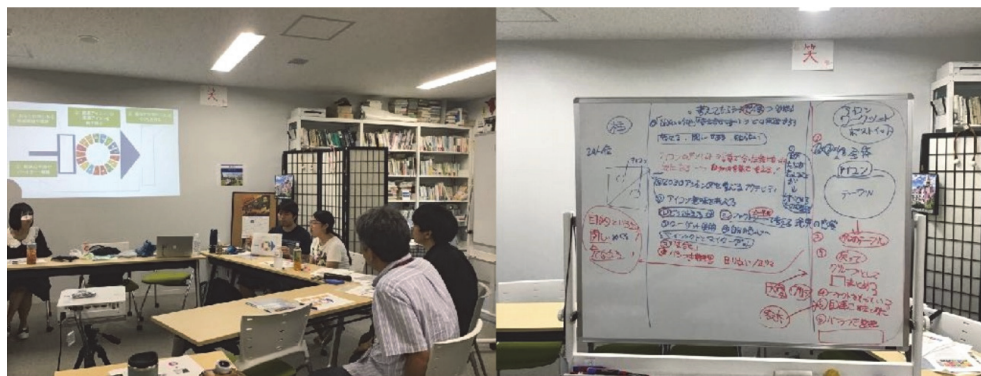


写真3 8月に実施した事前ミーティング(武蔵野大学 有明キャンパス 4号館)



写真 4 使用したモノクロアイコン
SDGs 以外のアイコンも使用
(中央、神田外語大学シンボルマーク)



図 6 ワークショップのミッション例
アイコンから抽出された連想キーワードにもとづき、赤字
部分を完成させる形で目指すべき状態を文章で表現する



写真 5 ワークショップ当日の写真(聖心女子大学 4号館 アクティビティスペース)

¹ 村山史世・相場史寛(2018)「2030 アジェンダ・SDGs を自分事化するためのツールの開発」日本環境教育学会関東支部年報 (12) 33-36 <http://jee.sakura.ne.jp/files/kanto/AnnualReport-12-033.pdf>

² みながく SD 研については、<https://SDGspbl.jimdo.com/>参照。

³ 「自分事化のフェーズ」論は、エコプロ2017同時開催セミナー「SDGs を活用して市民・企業・自治体で地域課題の解決」(2017 年 12 月 8 日 於東京ビックサイト 主催:武蔵野大学)において、石井雅章「企業の『本業』から取り組む SDGs」のプレゼンテーションで提唱された。

⁴ ESD-J「持続可能な開発のための教育推進会議(2019)「市民社会からの挑戦 ― ESD 推進 12 年間の軌跡 ESD-J 活動報告書 (2003 ~2015)」

⁵ 石井雅章・陣内雄次・勝浦信幸・長岡素彦(2017)「PBL 実践における学修成果の可視化手法」関係性の教育学 Vol. 17 No. 1 15-27 頁

⁶ 長岡素彦(2018)「SDGs・持続可能な共生をすすめる ESD・地域連携教育」共生科学 Vol. 9 34-43 頁

⁷ 長岡素彦(2018)「持続可能な開発計画と SF 国連仙台防災枠組への共生アプローチ」日本共生科学会第10回横浜関内大会一般発表 2018 年6月10日於ニュースパーク

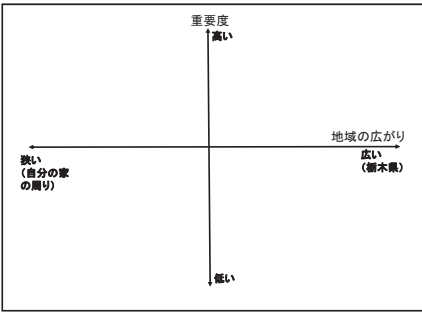
⁸ 「理解から一歩進んで取組へ」、環境会議(2018 秋号)124-125. 参考サイトとして <http://www.sustainablefuture.jp>

⁹ 「ERCA」とは機構の英文表記「Environmental Restoration and Conservation Agency」の略称。

¹⁰ <http://www.erca.go.jp/erca/houkoku/index2018.html>

¹¹ 前掲村山・相場(2018)

WS テーマ	具体的な事例を関連付けながら「身近な問題に置き換えて考える」
--------	--------------------------------

項 目	記 入 欄
① 実施団体・担当者	S新聞社・Nホールディングス 陣内雄次(宇都宮大学教育学部)
② 参加者・人数	栃木県内の高等学校に通う高校生26名
③ 自分事化のフェーズ	①、②SDGsと地域課題(ローカルイシュー)のつながりへの気づきをうながす段階。 ③自分事化へ向けての第一歩
④ 実施場所・日時・時間	研修・会議用施設「round」(栃木県那須町) 2018年8月2日 午前10時～11時30分
⑤ 目的・趣旨 (期待目標: 何を期待するのか)	一人ひとりが地域課題(ローカルイシュー)とSDGsのつながりを思い描きつつ、日常生活を送るようになる。
⑥ 目標・ねらい (WS における達成目標: 具体的に何を指すのか)	・SDGsと地域課題(ローカルイシュー)とのつながりへの気づきを得る。 ・「それに対して自分は何かができるのか」という思考への第一歩を踏み出す。
⑦ 実施内容 (どのようなことを)	① 本セッションのガイダンス ② 【各自】地域課題を付箋に書き出す。一枚にひとつ。何枚でも。 ③ 【グループワーク】模造紙に②の付箋を貼り付けていく。 ④ ③の検討内容を模造紙を使って発表 ⑤ 【グループワーク】各グループで特に重要と考える地域課題を抽出し、関連するSDGsのアイコンを模造紙に貼り込む。 ⑥ 本セッションの振り返り 
⑧ 準備物 (教材やワークシート)	パワーポイントによるプレゼンテーション用配布配付、ワーク用の模造紙・付箋・カラーペン・ハサミ・スティックのり・SDGsのアイコン
⑨ 評価項目 (目標に照らし合わせて具体的に)	① 地域課題(ローカルイシュー)の付箋を、各人が数多く書けたか。
◆評価方法	② 地域課題(ローカルイシュー)の重み付けがグループでできたか。
	③ SDGsと地域課題の関連づけができたか。

WS テーマ	これまでの取組とSDGs の関連を理解し、達成に貢献できるターゲットを明確にするワークショップ
項 目	記 入 欄
① 実施団体・担当者	全国地域づくり人財塾※・東日本支部 高橋朝美 ※総務省の自治体職員向け人材育成事業
② 参加者・人数	人財塾 OB/OG の自治体職員 28名 (SDGs に対する理解の深化)
③ 自分事化のフェーズ	自身のこれまでの取組がいくつかのゴール、ターゲットの達成に貢献していることを理解し、今後の展開を SDGs を活用して考える
④ 実施場所・日時・時間	実施場所: 地球環境パートナーシッププラザ (GEOC) 日時: 2018 年 7 月 25 日 (水) 13:15~16:50 レクチャー (35 分) + ワークショップ (3h・休憩含む)
⑤ 目的・趣旨 (期待目標: 何を期待するのか)	・SDGs についての理解を深め、ポイントを知る ・SDGs と自分のつながりを考える ・SDGs 達成に向けてできること/やりたい事/やるべきことを考える
⑥ 目標・ねらい (WS における達成目標: 具体的に何をを目指すのか)	①SDGs の本質を理解する ・SDGs を達成するために必要なことはなにかを知る。 ②これまでの取組を SDGs で振り返る ・自分の取組が何らかのゴールにつながっていることを理解する ③これからのアクションを SDGs で考える ・SDGs を活用し、自身の取組によって達成したいことを明確にする
⑦ 実施内容 (どのようなことを)	【導入】 ・SDGs に関するレクチャー+事例紹介 【ワーク①】 ・個人ワーク: プロセス分解図を作成する ※この時点では SDGs との関連付けはしない ・グループでシェア: その取組がどのゴール・ターゲットにつながっているかを話し合う 【ワーク②】 ・個人ワーク: 現時点での課題、展開への希望を書き出す ・個人ワーク: それに関わる人・こと・ものを書き出す ・グループでシェア: それぞれの案件にアイデアをフィードバックしながら共有 【ワーク③】 ・個人ワーク: ワーク①・②を踏まえて今後の展開を考え、自分の取組によって貢献したいターゲットを一つ決める。 ・個人ワーク: 定めたターゲットについて、自分なりの言葉に言い換えて文章を作成する ・グループでシェア
⑧ 準備物 (教材やワークシート)	①ワークシート(プロセス分解図) ②SDGs のゴールとターゲット一覧資料 ③ふせん ① A4 の紙 ② サインペン
⑨ 評価項目 (目標に照らし合わせて具体的に) ◆評価方法	ワーク① SDGs の本質を理解する ◆出てきたアイデアが、他セクター・他分野との協働が前提となっているか ◆地域および現場の課題が明確になっているか ワーク② これまでの取組を SDGs で振り返る ◆当てはめたゴールのターゲットまで意味づけができていないか ワーク③ これからのアクションを SDGs で考える ◆ミッションにふさわしいターゲットを選択し、自分なりの言葉でターゲットを表現できているか。

WS テーマ	わたしたちにとっての SDGs を考えよう NPO x 企業 x 地域で解決する 17 の課題-SDGs でつながろう
--------	--

項 目	記 入 欄
① 実施団体・担当者	協働ステーション中央 ファシリテーター: 石井雅章(みがく SD 研究会、神田外語大学)
② 参加者・人数	一般(市民・NPO・企業・行政などの混成)向け
③ 自分事化のフェーズ	③、⑤、⑥、⑦
④ 実施場所・日時・時間	2018 年 1 月 30 日 協働ステーション中央(東京都中央区)
⑤ 目的・趣旨 (期待目標: 何を期待するのか)	・2030 年に向けた「持続可能性」に関する感覚を身につける。 ・2030 年目標を達成するために必要な条件、達成を妨げる要因を理解する。 ・自身を取り巻く世界の「持続可能性」を考え、自分ごと化する。
⑥ 目標・ねらい (WS における達成目標: 具体的に何をを目指すのか)	自分を取り巻く世界を「持続可能性」の観点から捉え直し、SDGs の具体的な目標ごとにそれが「達成」できているかどうかを判断する視点を養う。
⑦ 実施内容 (どのようなことを)	A. 「戌年自己紹介」 2018 年から 12 年前である 2006 年と、現在(2018 年)になにをしていた(している)かについて、お互いに自己紹介する。 B. 「お題別達成度可視化ワーク」 ・SDGs の各目標(169)をわかりやすく表現したお題(目標)をいくつか提示し、2006 年、2018 年、2030 年の各時点で、自分の周囲の世界でそのお題(目標)がどの程度達成されていたか/いるか/いるだろうかを色別付箋で配置して、可視化及び共有する。 ・可視化された各時点での達成度合いについて、各々がなぜそう考えたのかに関する根拠もしくは原因を、別色の付箋に書いて可視化及び共有する。 ・各グループが作成した成果物を掲示し、参加者が巡回しながら発表・共有する。
⑧ 準備物 (教材やワークシート)	参加者名簿(事前グループ分け)、模造紙、色別付箋(4 色)、サインペン(付箋記入用)、進行用スライド。
⑨ 評価項目 (目標に照らし合わせて具体的に) ◆評価方法	・模造紙と付箋で作成した成果物の完成度 ・成果物共有後のディスカッション(見方によって、課題達成可能、持続可能の判断が異なることの理解度を測る) ・振り返りシート及びアンケート(自身を取り巻く世界と持続可能性のつながりに関する自分ごと化の程度を測る)

WS テーマ	SDGs を活用して市民、企業、自治体で地域課題の解決を目指す
--------	---------------------------------

項 目	記 入 欄
① 実施団体・担当者	サステナブルフューチャー 一般社団法人 地域連携プラットフォーム 代表理事 長岡素彦
② 参加者・人数	市民、企業、自治体、小中高教員、大学教員、学生 30 名
③ 自分事化のフェーズ	②「理解」フェーズ ⑥ステークホルダーとの 関わり方を捉え直す
④ 実施場所・日時・時間	小石川運動場会議室(東京都文京区) 2018 年7月 21 日 1240-1630
⑤ 目的・趣旨 (期待目標: 何を期待するの か)	SDGs 理解とステークホルダーとの 関わり方を捉え直す SDGs の基本から、SDGs を自分事として考える手法や学生、市民、企業、行 政、大学が協働して SDGs に取り組むやり方などを学び、創出する
⑥ 目標・ねらい (WS における達成目標: 具 体的に何をを目指すのか)	SDGs の基本から、自分事として考え、パートナーシップを意識する
⑦ 実施内容 (どのようなことを)	(WS0)趣旨説明 とWS「SD を理解する」及びファシリテーター 一般社団法人 地域連携プラットフォーム 代表理事 長岡素彦 レクチャー「SDGs に取り組むとは」 神田外語大学 石井雅章准教授 参加者の SDGs アクションや取り組み、これからの構想の紹介 株式会社東急総合研究所、城西大学勝浦ゼミ、NPO 法人 COM (WS1)SDGs を理解するワークショップ ・SDGs と向き合う (WS2)SDGs に取り組むためのワークショップ ・SDGs の現状 ・SDGs の自分事化 (WS3)SDGs を活用した市民、企業、自治体、学校・大学での課題解決に向けて ふりかえり・まとめ 「既に決められた開発目標を唯一絶対のゴールとするのではなく、自分たちの 主体的に考えたビジョンから目指す社会を描き、そこで直面する課題解決の ために、人びとが開発目標を『使いこなせる』ような機会となることを目指して います」
⑧ 準備物 (教材やワークシート)	ワークショップワークブック「持続可能な未来」、SDGs ファクトシート、SDGs おで んシート、学びの振り返りシート
⑨ 評価項目 (目標に照らし合 わせて具体的に) ◆評価方法	◆評価項目 学びの振り返りシート 1)「なるほど! (納得)」を感じた 2)「おどろき! (驚き)」を感じた 3)「あれ? (疑問)」を感じた 4)「もっと知りたい! (知識欲)」を感じた ◆評価方法 主催 WS 各グループの発表・成果資料を分析

WS テーマ	環境再生保全機構若手職員 SDGsワークショップ(環境報告書特集企画)
--------	-------------------------------------

項 目	記 入 欄
① 実施団体・担当者	(独)環境再生保全機構(機構) ファシリテーター: 滝口直樹
② 参加者・人数	環境再生保全機構 若手職員(2-5 年目) 13 名
③ 自分事化のフェーズ	活動を当てはめるフェーズからステークホルダーを意識するところまで。 ②「内容を理解するフェーズ」は別途研修会で学ぶ機会を用意。
④ 実施場所・日時・時間	2018 年 8 月 9 日(木)15:00-17:00 環境再生保全機構 第 1 会議室
⑤ 目的・趣旨 (期待目標: 何を期待するの か)	SDGsを通じて、機構組織の各事業・業務を捉えなおす。 SDGsを、自分の業務に引き付けて自分なりに考えてみる。
⑥ 目標・ねらい (WS における達成目標: 具 体的に何をを目指すのか)	・自分の業務と SDGsとのかかわりについて考える。 ・今後の業務実施の改善点を、SDGsの視点から考え直してみる。 ・組織の活動が SDGsに深くかかわっていることを認識し、SDGsの視点から本組織の役割、自分の業務の役割を確認する。
⑦ 実施内容 (どのようなことを)	・事前の情報提供として、SDGs全般についての研修会を実施(7/30) ・事前準備として、SDGs ワークシート(SDGs おでん)を埋める作業をお願いした。記入内容: ①関心ある課題(直接業務にかかわらないものでも可)、②それにかかわる SDGsの目標、③2030 年に目指す状況、④取り組みの戦略・協力相手 ・ワークショップ当日 機構研修担当者からの 2030 年をめぐる将来予測、ファシリテーターから機構の役割について、それぞれ追加情報提供。 情報提供も踏まえ、ワークシートを修正。 4 グループに分かれ、お互いにワークシートの内容を説明、質疑・意見だし。 参加者すべてから、ワークシートを発表。質疑。 (なお、このワークショップは機構の環境報告書の特集企画である。ワークショップの概要と、参加者から 3 名を対象としたインタビューが記事になっている)
⑧ 準備物 (教材やワークシート)	・SDGsワークシート(SDGsおでん) ・情報提供のパワーポイントスライド ・SDGsの目標及び targets 和訳
⑨ 評価項目 ◆評価方法	振り返りシートの作成 その中で、業務にかかわって SDGsを捉えることができているかをチェック。

WS テーマ	学生と共に学ぶ SDGs ワークショップ
項 目	記 入 欄
① 実施団体・担当者	未来の学びと持続可能な開発・発展研究会(みがくSD研) 【みがくSD研】石井雅章(神田外語大学)・長岡素彦(一般社団法人地域連携プラットフォーム)・村松陸雄(武蔵野大学)・村山史世(麻布大学)・伊藤通子(東京都市大学)・滝口直樹(合同会社環境活動支援工房) 【学生】志垣南斗(武蔵野大学)・葛西妃南(武蔵野大学)・丸山清太(武蔵野大学)・大西里奈(武蔵野大学)・沖俊弥(武蔵野大学)・平本峻(麻布大学)・渡邊菜乃花(麻布大学)・相場史寛(麻布大学)・三橋晴香(麻布大学)・相馬沙耶(神田外語大学) 【グラフィックレコーダー】本園大介
② 参加者・人数 (何を期待するのか)	31名 ※学生スタッフもワークショップに参加
③ 自分事化のフェーズ	②「理解」フェーズ
④ 実施場所・日時・時間	場所:未来の先生展 2018 聖心女子大学 4号館 アクティビティスペース 日時:2018年9月16日(日) 10:00~11:30
⑤ 目的・趣旨 (期待目標:何を期待するのか)	・SDGs が目指す 2030 年の<世界>を自分たちのあたまで考えて理解する ・前向きなくモヤモヤ>を感じてもらうことで、学びをワークショップの時間のみに完結することなく、SDGs に対する能動的な未来の学びへ誘う
⑥ 目標・ねらい (WS における達成目標: 具体的に何をを目指すのか)	・モノクロアイコンから 2030 年に向けて目指すべき状態を想像する ・SDGs を所与のものとして、モノクロアイコンを端緒にした連想により、そもそも、なぜ、世界中の人々が SDGs という目標を設定しようとしたのかという根本的な考え方を共有する
⑦ 実施内容 (どのようなことを)	【アイスブレイク】 ① メンバーの自己紹介、配布されたモノクロアイコンを採用するか、チームで決める 【ワーク】 ② ホームグループで、モノクロアイコンから連想するキーワードを抽出 ③ 他のグループに別れて、モノクロアイコンから連想するキーワードを抽出(1回目) ④ 他のグループに別れて、モノクロアイコンから連想するキーワードを抽出(2回目) ⑤ ホームグループに戻って、抽出された連想キーワードを元に、目指すべき状態の文を作成する ⑥ 自由に移動して、各チームの成果物を共有する ⑧ 振り返りシートにもとづき、ワークショップ内容を振り返る
⑨ 準備物 (教材やワークシート)	・チーム名用紙(A~H) ・モノクロアイコン(SDGs の番号は伏せたもの、A4 サイズ) ・模造紙 ・マーカー ・色別ポストイット ・振り返りシート ・説明用スライド、プロジェクタ、PC
⑩ 評価項目 (目標に照らし合わせて具体的に)	次の内容からなる振り返りシートにもとづき評価 ①今日「おこなったこと(事実)」を書いてください。 ②今日のワークショップをつうじて、自分自身になにかしらの変容が生じた感覚がありましたか? 下記の当てはまるものすべてにチェックしてください。 ☐「なるほど!(納得)」を感じた、☐「おどろき!(驚き)」を感じた、☐「あれ?(疑問)」を感じた、☐「もっと知りたい!(知識欲)」を感じた、☐とくになにも感じなかった ③今日ワークショップをつうじて感じた変容について、思い返してみた内容を言葉で記述してみてください。 ⑤あなたにとって「未来の先生(オトナ)」とはどのようなものですか?